

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事 —考古学編—

「企画展示」

VTR/30分20秒

□研究組織

—センター教官—

福井 康雄（教授・主査）

高橋 秀明（助教授）

芝崎 順司（助手）

宮本 友弘（助手）

—客員教官—

木下正史（東京学芸大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

永島正春（国立歴史民俗博物館教授）

—研究協力者—

安藤孝一（東京国立博物館学芸考古課長）

須藤 護（竜谷大学教授）

早川智明（埼玉県立博物館館長）

—埼玉県立博物館—

林 宏一（学芸部長）

今泉泰之（企画展示課長）

石岡憲雄（資料調査課長）

宮滝交二（学芸員）

加藤かな子（学芸員）

利根川彰彦（学芸員）

二階堂実（学芸員）

杉山正司（学芸員）

加藤光男（学芸員）

栗原和彦（学芸員）

若松良一（学芸員）

西口良子（学芸員）

□ 基本資料

題 名	学部教育教材博物館学芸員の仕事—考古学編— 「企画展示」
制 作	メディア教育開発センター（大学共同利用機関）
制 作 協 力	NHK エデュケーショナル
上 映 時 間	30分20秒
原 版	D-3・2分の1テープ
撮 影	(第一回) 平成7年10月16日 (月) (第二回) 平成7年10月18日 (水)～19日 (木) (第三回) 平成7年10月23日 (月) (第四回) 平成7年11月21日 (火)～22日 (水) (第五回) 平成8年11月24日 (金) (第六回) 平成8年1月17日 (水) 研究スタジオ
本 編 集	平成8年2月13日 (火)、16日 (金) ※制作棟V3
録 音	平成8年3月6日 (水) ※制作棟・RAスタジオ
完 成 試 写	平成8年3月25日 (月)

□ 画面の時間経過

(1) 開始タイトル制作・協力	(16秒)	16秒
(2) プロローグ	—内覧会の会場で— (1分49秒)	2分5秒
(3) 展示企画の開発	—埼玉県立博物館の研究体制— (3分8秒)	5分13秒
(4) 展示作業の開発と準備	(8分46秒)	13分59秒
(5) 展示作業の実際	(13分23秒)	27分22秒
(6) エピローグ	—企画展示の意義— (2分4秒)	29分26秒
(7) 終了タイトル	(54秒)	30分20秒

音楽	効果	画面	時間	解説
		1	開始タイトル	(16秒)
			○制作・協力	(16秒)
		2	プロローグ —内覧会の会場で—	(1分49秒)
	拍手 鳥の 声	○埼玉県立博物館 入口— T①W 「平成7年10月23日 特別展・古代東国の 渡来文化内覧会」		
		○同一館内ロビー ・挨拶をする館長 T②W 「埼玉県立博物館 館長 早川智明」 ・聴衆の中の担当学芸員		N「特別展《古代東国の渡来文化》の内覧会 — 来場者の中には、この展示を企画し、ほぼ 一年にわたって開催の準備に携わってきた 企画展示担当の学芸員の顔も見えます。
	拍手	T③W 「学芸員 宮瀧交二 学芸員 加藤かな子」 ・テーブルカットをする 館長や来賓たち—		
M1a		○企画展示会場 やって来る招待客た ちが、担当学芸員の 案内で会場を見て回 る。		常設展示とともに、博物館学芸員の大切な 研究成果の発表の場でもある企画展示。こ の展示が、どのような過程を経て完成に 至ったのかを振り返りながら、企画展示に おける博物館学芸員の仕事について見てい くことにしましょう」
M1b		○メインタイトル T④W 「博物館学芸員の仕事 (考古学系博物館編) 企画展示」 (WIPE)	(2分 5秒)	

鳥の
声

3 展示企画の開発 —埼玉県立博物館の研究体制— (3分8秒)

○埼玉県立博物館—外
景緑の木立に囲まれ
て立つ、そのたたず
まい

○同一内部
・廊下
進んでいく。

・学芸事務室
その一隅で、画面に
向かって語る学芸部
長

T⑤W
「埼玉県立博物館
学芸部長 林 宏一」

T⑥W
「

学芸部	教育普及課
	資料調査課
	常設展示課
	企画展示課

」

・会議室
打合わせする人々

・図書室
パソコンを操作した
り、図書を見る人々

・学芸事務室
語り続ける学芸部長

○紀要

○報告書

N「博物館の展示事業は、学芸員たちの日常
の調査研究活動が基盤となって進められま
す。

では、埼玉県立博物館の場合、どのような
体制のもとで調査研究を行っているので
しょうか？」

林「当館の場合は、学芸部に4課ございまし
てその中で、特に展示のほうに関わり合う
のは常設展示課と、それから資料管理関係
で資料調査課というのがあります。それか
ら教育普及関係は教育普及課という形で4
課に分かれておりまして、特に、考古系の
学芸員は、資料調査課及び常設展示課、そ
れから、企画展示課を中心として6名の職
員がおります。

で、縄文から始まって弥生、あるいは、古
墳、あるいは歴史考古学というような形で
それぞれ、専門分野があるわけですがそれ
ども、それぞれの専門分野に従って、県内の
様々な資料の調査、あるいは、情報の収集
それに伴う県外、あるいは、広く国外の情
報も併せて、情報を収集するというような
活動をしています。

まあ、埼玉県というのは、非常に埋蔵文化
財の発掘が多いところで、そういう意味で
は、資料・情報ともに豊富なところなん
ですけれども、紀要関係に、それぞれの担当
した、あるいは、自分が関心を抱いたテ
ーマについて発表すると。

それから、まあ、資料採集事業としては
ですね。平成4年にですね、発掘を実施して、
5年に報告書をまとめたという形で、こ
ういう神庭平洞窟、大滝村にあるんですけ
れども、洞窟遺跡の、発掘調査報告書なん
かも出したりしています。

特別展関係では、日頃の、さまざまなテ
ーマを設定したうえで、調査を進めているわ

		<p>(DVE)</p> <p>○ポスター (関東の弥生文化)</p> <p>(さいたまの海)</p> <p>(中世の陶磁器)</p> <p>○図録</p> <p>(WIPE)</p>	<p>(5分 13秒)</p>	<p>けですけど、そういう考古系のもんとしては、埼玉を一つのベースにして、そして、広く、関東・日本へと視野を広げた形での展覧会を実施しているわけですけど、そういったからみで、平成2年度には、「さいたまの海」という、ちょうど、埼玉県縄文時代中期、海が、かなり入り込んでいたということで、その時代の展覧会をいたしました。</p> <p>それから、平成5年度には、埼玉県を中心として、関東の、中世の陶磁器の世界、そういった焼物を集めてですね、その展覧会も開催しております」</p> <p>N「学芸員たちの、いろいろな研究を背景に行われてきた、これまでの企画展の数々…では、今回の展示の企画は、どのようなきざつから生まれたのでしょうか？」</p>
M2		<p>○博物館・館内 ・学芸事務室 語る学芸員一</p> <p>○基本計画書</p> <p>○展示構成概要</p> <p>○書庫 カメラが進んでいく その一隅で、担当学芸員が、調査をして</p>		<p>4 展示企画の計画と準備 (8分46秒)</p> <p>宮滝「武蔵国の古代には、もう渡来人がたくさん、この地域に住んでいて、武蔵国の古代文化をですね、形成し、また、この土地で生活をしていたことは、これは、もう広く知られたところですよ。ところが、今まではですね、ある意味では、ちょっと私たちが調べて見て意外だったんですけども、こうした博物館で、そういった渡来人の足跡をですね、跡づけるような企画が、意外となされていなかったんです」</p> <p>N「こうして、今回の展示のテーマは、関東地方を中心とした、古代東国における渡来文化と決まり、早速、担当の学芸員によって、展示シナリオの概略が作られました。</p> <p>展示シナリオが決まると、学芸員たちは、次に、その構成に沿って、さまざまな資料に当たり、調査研究を深めていくことにな</p>

いる。

(OL)

○展覧会パンフレット

○発掘調査報告書

○写真集等

○収蔵庫

担当の学芸員と、収蔵品の調査を行う宮滝氏—

T⑦W

「火葬蔵骨器」

(WIPE)

○遺跡（野理場）

やってくる担当学芸員たち—

(OL)

○博物館・館内

・学芸事務所

語り続ける担当の学芸員—

ります。

これまでに、他の博物館で行われた、渡来文化関係の展覧会の資料—

都道府県や市町村の発掘調査の報告書—

テーマに関係する写真集が刊行物なども、丹念に調査され、その資料が、展示のテーマにふさわしいものかどうかを検討されます。

先行研究の調査と併せて、博物館所蔵の資料の再調査も行われます。

また、必要に応じて、館外に出張しての調査も行われます。

こうして、さまざまな調査研究を重ねる中で、展示シナリオも、しだいに具体的なものへと練り上げられていくことになるのです」

宮滝「こう、私共が博物館の中において、そういうカタログや文献で調べる調査と、実際に、そういうものを見て、お持ちの方のところに足を運んでする調査と、まあ、二つあるんですけども、そういうことを繰り返していきながら、構成としては、シナリオとしては、こういうことを考えているんだけど、実際、調べてみたら、資料としては、ちょっとそれを裏付ける資料が、現在見つからないので、断念する部分もありました。で、逆に、シナリオとしては、当初は想定しなかったところも、調べていく過程で、面白い資料が沢山見つかって、それじゃあ、こういうシナリオ、シナリオの上で、こういうところを構成上入れたらどうかとか、まあ、そういうことも逆に増えたりとか、まあ、これはもう、資料調査をし

	<p>○資料のリスト (OL)</p> <p>○イラスト ・全体像—</p> <p>・プロローグ—</p> <p>・第一部—</p> <p>・第二部—</p> <p>・第三部—</p> <p>・エピローグ—</p> <p>○博物館・館内 ・会議室 進行会議を行う担当者たち—</p> <p>T⑧W 「進行会議」 (OL)</p> <p>○開催準備予定表 (WIPE)</p> <p>○大宮市教育委員会 ・外景</p>	<p>ながら、構成を、よりこつ練っていくというですね、まあ、一番私たちが力を入れなければいけないところだと思うんですけども、そういう調査が、ずっと続きまして、そして、出品する資料のリストを順番に固めていくわけです」</p> <p>N「最終的な資料のリスト—</p> <p>そして、展示シナリオ—このシナリオでは関東地方を中心とした古代の渡来文化が、五つのコーナーで紹介されることになっています。</p> <p>プロローグ—世界の中の日本—</p> <p>第一部 古墳文化と渡来人 —もたらされた新しい技術—</p> <p>第二部 奈良・平安時代の国際交流</p> <p>第三部 東国に来た渡来人 —移住から定着へ—</p> <p>そして、エピローグ —今に残る渡来文化—。</p> <p>こうして、五つのコーナーによって、日本の文化に大きな影響を与えた渡来文化の全体像を浮かび上がらせようというのが、この展示シナリオのねらいです。</p> <p>スケジュールの進行会議— シナリオに基づく資料調査が一段落したところで、さらに、さまざまな作業が、展示の開催日を目指して進められていきます。</p> <p>局示の作業は、大きく、企画調査・展示・図録他・広報活動…などの四つに分けられますが、企画調査の準備が、ほぼ終了した現段階から、展示や広報のための具体的な準備も、学芸員たちが手分けをしておこなうこととなります。</p> <p>展示の資料を借用するための下交渉—</p>
--	---	--

	<p>T⑨W 「大宮市教育委員会」 担当の学芸員がやっ てくる。</p> <p>○同・内部 出陳予定の口琴を見 せてもらう担当者—</p> <p>T⑩W 「口琴」 (WIPE)</p> <p>○博物館・館内 ・スタジオ (WIPE)</p> <p>・作業室 (編集作業する学芸員 —)</p> <p>T⑪W 「展示解説書の作成」 (WIPE) (ポスターの検討をす る学芸員)</p> <p>T⑫W 「ポスター作成」 (WIPE) (展示ディスプレイ案 検討)</p> <p>T⑬W 「展示ディスプレイ の検討」 (WIPE)</p>	(13分 59秒)	<p>展示資料を借用するための下交渉—</p> <p>展示資料の撮影—</p> <p>撮影した写真を使っての展示解説書の編集 —</p> <p>広報用のポスターのデザインの打ち合わせ —</p> <p>そして、展示ディスプレイの検討— 会場に入った見学者に、展示資料をどのよ うに見せていくかといった、展示ディスプ レイの最終案がしだいに固められていきま す。 こうして、今回の特別展の企画が開始され てから、凡そ一年、長い準備の期間を経て 展示作業の最後の山場である、展示資料の 搬入と展示作業の段階を迎えたのです」</p>
	5 展示作業の実際		(13分23秒)
車音	<p>○道 トラックがやってく る。</p> <p>○資料の借用先</p>		<p>N「展示資料を運ぶための美術品専用輸送車 がやってきます。</p> <p>車がやってきたのは、市原市埋蔵文化財調</p>

<p>M3</p> <p>↓</p>	<p>車音</p>	<p>外部— T⑭W 「市原市埋蔵文化財 調査センター」 輸送車が到着する。</p> <p>○同館—内部 ・展示室 展示ケースから、借 用資料が取り出され ていく。</p> <p>・作業室 (借用資料のチェッ ク)</p> <p>(梱包)</p> <p>(資料の最終確認)</p> <p>(借用書)</p> <p>(OL)</p> <p>○走る車—内部 担当の学芸員が、メ モを取っている。 (OL)</p> <p>○夕暮れの街 (OL)</p> <p>○夜の博物館—入口 借用資料を積んだ車 が到着する。 (WIPE)</p> <p>○同一館内 ・特別展示室 (開梱の作業)</p> <p>T⑮W 「開梱」</p>	<p>査センターです。</p> <p>車に添乗してきた担当の学芸員は、早速、借用資料の引き取りの作業に入ります。</p> <p>展示資料の借用に当たっては、まず、資料の現状が克明に記録されます。</p> <p>借用した資料の梱包—</p> <p>貴重な資料が損なわれないように、美術運搬の専門の係員によって、慎重に梱包作業が続けられていきます。</p> <p>こうして、最後に、借用資料の状態の確認を、もう一度お互いに行った後—</p> <p>借用書を手渡して、展示資料借用の作業完了することになります。</p> <p>今回の特別展で、展示される資料は四百数十点—各地に点在する展示資料を搬入するために、開催日が近づくにつれて、学芸員たちは、手分けをして、日夜、このような作業を続けることとなります」</p> <p>N「特別展が行われる展示室で、集められた展示資料の開梱の作業が始まりました。</p> <p>この開梱の作業の際、学芸員として気をつけなければならないのは、どんなことでしょうか？ 担当の学芸員に聞いてみまし</p>
--------------------	-----------	--	--

		<p>(手を止めて語る学芸員)</p> <p>(包みを開く手元)</p> <p>(仮置き作業) 装飾品—</p> <p>銅椀—</p> <p>馬具—</p> <p>(WIPE) (展示台の作成) 木製の台を作る。</p> <p>台に、布を貼る。</p> <p>(WIPE) (飾り付けの作業)</p>	<p>た」</p> <p>宮滝「折角、貴重な資料をお借りしてきたわけですから、その資料を、こう大切にですね。まあ、傷まないように梱包してあるんですけど、それを、梱包した順序、全くその反対にですね、きちんと、こう手順を追って解いていくと。まあ、そういうことで、必ずもう、お借りした貴重な資料を痛めずにですね、大切に、展示出来るように、こう取り出すということが、もう一番の目的です。</p> <p>考古資料の場合、長く土中に埋もれていたということもありまして、非常に脆いものが多いんですね。ですから、必ず、開けていきなりこう取り出すのではなくて、一度状態を、開ける人も、もう一度確認をしながら、どういう風に持てば、あるいは、どういう風に動かせば一番大丈夫かということ、非常に、まあ気をつけながらやっています」</p> <p>N「大切な資料に、汗や脂が付かないように作業は、手袋をはめた手で進められていきます。</p> <p>金属製の資料などを扱う際には、このように、手袋をはめたり、また、服装も、大切な資料を引っかけたりしないように、ボタンのないシャツやジャンパーにするなど、細心の注意を払います。</p> <p>こうして、荷解きをして取り出した資料は、予定の陳列ケースに、まず仮置きをします。そして、その状態をよく確認して、展示プランを練ってから、本格的な飾り付けに入っていくことになります。</p> <p>展示プランに従って、それぞれの資料を載せる展示台が作られていきます。</p> <p>展示資料を載せる台の大きさや形、そこに貼るフェルトの色なども、展示の効果を高める重要な要素の一つです。</p>
--	--	--	--

作業音

	<p>資料に敷く布の検討 —</p> <p>埴輪の設置—</p> <p>祭祀用資料の配置— T⑩W 「祭祀遺跡」</p> <p>馬具の飾り付け—</p> <p>金冠の飾り付け—</p> <p>(語りかける担当の学 芸員) T⑪W 「レプリカ=複製品」</p>	<p>資料を、どのように展示したら、最も効果的か？ 各コーナーでは、仮置き資料をもとに、本格的な飾り付けの作業が進められていきます。</p> <p>何回も試行錯誤を重ねながら、しだいに形を整えていく、各コーナーの展示の飾り付け—</p> <p>こうして、飾り付けが進むにつれ、展示資料は、しだいに仮置きの状態から完全な形へと近づいていくのです。</p> <p>では、学芸員が展示のプランを固めていく場合、どのようなことがポイントとなるのでしょうか？ 今、飾り付けの進められている、この第一部・金属工芸の世界のコーナーの場合を例に、担当の学芸員に聞いてみることにしましょう」</p> <p>宮滝「…例えばですね。こちらの資料ですけれども、これは、あのうレプリカですけれども、あのう、冠の一部なんですね。で、これは、例えば、こう平らに置いてしまうんですね、こう、ケースガラスがありますので、こう真上から覗けませんので、非常に見づらくなります。ですから、こういう資料のときには、予めこういう斜めの台を、斜面の斜に、斜という字を使いまして斜台と呼んでおりますけれども、こういう斜台の上に置きまして、お客さんにこう見やすいように、予め工夫すると…</p> <p>で、それからまた、こういう、今、一番ベースの台はグレー、その上は、こういう若草色のフェルトを使いますが、こういう色の上に、これをいきなり置いたんでは、ちょっと目立たないわけですね。ですから、こういうときには、この資料を目立たせるために、わざとこの赤い生地を下に敷きまして、強調して置いたりもしているわけなんですね。</p> <p>それから今度は、こちらですけれども、こ</p>
--	---	--

T⑬W

「三味塚古墳」

(WIPE)

(仕上げ段階の作業)

展示資料への照明の
調節をする作業員一

(剣のテグス掛け)

(土器のテグス掛け)

(写真パネルの作成)

写真を切り抜き、台
紙に貼って資料に添
える。

ちらも、ええ、これも古墳時代の冠ですが、展示ケースの床の高さはこの高さなんです。実際、全部、あちらもこちらも、一旦、このグレーの、この大きな展示台を入れまして、一応、高さを一段上げてあるわけですが、それでも、こういった資料の場合には、あんまり高さが低い資料ですから、あまり低いところに展示してしまつては、見づらいんですね。お客さんが、こう腰を屈めて覗き込むようでは、ちょっと申し訳ないわけです。一番、お客さんが見やすい形を考えてあげるといのが、もう常に、展示のときに、あのう、気を使うところなんですけれども…ですから、こういう、ここですと、一つ二つ台を置きまして、高さをこう上げて、この冠を置いています。で、この冠はこちらが実物なんですけれども、茨城県の三味塚古墳というところで出まして、大変、全国的にも有名な冠なんです、こちらが実物で、こちらが、その当時の輝きを、今に復元したレプリカになります。ですから、この実物と、こちらの、実物が、当時はきつとこういう輝きを放っていたらうというレプリカを二つ並べて、今回、展示してあるわけです」

N「展示の作業が始まってから三日目。最終日を迎えて、飾り付けの作業は、いよいよ仕上げの段階に入っていきます。

テグスで、展示資料を固定する作業一

地震などの振動で、貴重な資料が損なわれないように、倒れやすい資料については、このようにテグスを掛け、転倒防止の処置をします。

不測の事態に備えて、あらかじめ対応の処置をしておくことも、飾り付けを行う場合、必要となる作業です。

写真パネルが作られていきます。

展示内容の理解を助けるために、資料に

		<p>(剣のテグス掛け)</p> <p>(土器のテグス掛け)</p> <p>(写真パネルの作成) 写真を切り抜き、台紙に貼って資料に添える。</p> <p>(ネームプレートやキャプションの作成と配置)</p> <p>(色によって内容を表示したキャプション)</p> <p>ピンクのキャプション</p> <p>青のキャプション</p> <p>白のキャプション</p> <p>○夜の博物館—外景</p>		<p>よっては、このように写真パネルを添えることも、欠かすことの出来ない作業です。</p> <p>テグスで、展示資料を固定する作業—</p> <p>地震などの振動で、貴重な資料が損なわれないように、倒れやすい資料については、このようにテグスを掛け、転倒防止の処置をします。</p> <p>不測の事態に備えて、あらかじめ対応の処置をしておくことも、飾り付けを行う場合、必要となる作業です。</p> <p>写真パネルが作られています。</p> <p>展示内容の理解を助けるために、資料によっても、このように写真パネルを添えることも、欠かすことの出来ない作業です。</p> <p>展示室の片隅で行われている、キャプションを作るための作業も最終段階に入っています。</p> <p>この度の展示では、担当の学芸員が、資料の一つ一つの生産地を調査し分類して、三色のキャプションに仕分けして示すことにしました。</p> <p>中国や朝鮮半島で作られ、日本に輸入されたものであることを示すピンクの表示—</p> <p>日本にやってきた渡来人が作ったものであることを示す青の表示—</p> <p>そして、渡来文化の影響により、日本国内で作られたものであることを示す白の表示—こうしたキャプションの工夫も、学芸員の調査研究活動の成果の一つともいえるでしょう。</p> <p>こうして、長い準備の期間をかけ、さまざまな作業を重ねて、特別展《古代東国の渡</p>
--	--	---	--	---

鐘の音

		(WIPE)	(27分 22秒)	来文化》は、開催の日を迎えたのです」
会場 音	5	エピローグ —企画展示の意義—		(2分4秒)
		<p>○企画展示会場 内覧会が続いている。</p> <p>(OL)</p> <p>○完成した展示 その上に、担当の学芸員の声が流れている。</p> <p>T①9W 「プロローグ—世界の 中の日本」</p> <p>T②0W 「第一部 古墳文化 と渡来人 —もたら された新しい技術 —」</p> <p>T21W 「第2部 奈良・平 安時代の国際交流」</p> <p>T22W 「第3部 東国にき た渡来人」</p>	<p>N「賑わいの続く内覧会の会場—</p> <p>ほぼ一年にわたって、この特別展に携わってきた担当の学芸員にとっては、これからの開催期間が、自分たちの作業の成果が問われるときでもあります。</p> <p>では、この展示を担当した学芸員は、この度の展示の仕事を、どのようにとらえて作業を進めてきたのでしょうか？ その意見を聞いてみましょう」</p> <p>宮滝「…博物館の学芸員にとって、展示というのは、もう、本当にもう一番大切なコンセプトです。</p> <p>私たち博物館は、図書館ですとか、あるいは、公民館といった、他の社会教育施設と違いまして、あくまでも、展示を通してお客様と対話して、資料を通じて、私たちの主張をお客様に見ていただく、知っていただくという…。展示というものが、私たち学芸員と、展覧会を見にきていただくお客様との大切な懸け橋になってくるわけです。</p> <p>そういう中で、調査研究の重要性は、先程来、申し上げてきましたけれども、一般に普通の研究者の方は、調査研究の成果は、そのまま学术论文で発表されたり、あるいは、講演会でお話しされたりという、あるいは、学会で発表されたりという形で公にしていけますけれども、私たちの博物館の仕事では、そういう調査研究の成果は、必ず、物を通してお客様に見ていただくという、こういう大きな特徴があります。</p>	

	<p>T23W 「エピローグ 今に残る渡来文化」</p> <p>○博物館—特別展示場内 語り続ける担当の学芸員—</p>	(OL) (29分 26秒)	<p>ですから、折角調査研究して、ある成果が生まれましても、それを、こううまく伝える資料が見つからない場合もときにはあります。まあ、今回も、いくつかそういうことがありまして、この展覧会で終わりというのではなくてですね。今回、この展覧会の準備の過程で発見しました、いろいろな成果を、もっともっと具体的に反映できる資料はないだろうか—という調査研究を、さらに続けていきたいと思っています」</p>
6	終了タイトル		(54秒)
	<p>○回想画面に重ねて— T23W 「学部教育教材作成研究会 安藤孝一(東京国立博物館) 亀井明德(専修大学) 木下正史(東京学芸大学) 白石太一郎(国立歴史民俗博物館) 永島正春(国立歴史民俗博物館) 早川智明(埼玉県立博物館) (WIPE) 埼玉県立博物館 林 宏一(学芸部長) 今泉泰之(企画展示課長) 石岡憲雄(資料調査課長) 宮滝交二(学芸員) 加藤かな子(学芸員) 利根川章彦(学芸員) (WIPE) 二階堂 実(学芸員) 杉山正司(学芸員) 加藤光男(学芸員) 栗原和彦(学芸員) 若松良一(学芸員)</p>		

西田由子 (学芸員)
(WIPE)

放送教育開発セン
ター

川島淳一

福井康雄

須藤 護

芝崎順司

宮本友弘

(WIPE)

製作協力 NHK エ
デュケーショナル

制作スタッフ

脚本・構成

福井康雄

撮影

西川浩史

照明

金子昭三

技術

織田寿一郎

制作進行

落合智子 黒柳周一

(OL)

学部教育教材

博物館学芸員の仕事

—考古学編—

企画展示 終

(画面溶解) (30分
20秒)